

(6月29日)「ローマの信徒への手紙6:1~7」

わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。

(ローマの信徒への手紙6章6節)

・日本聖公会で用いられている洗礼式の式文には、このような一文があります。水の聖別(祈祷書279頁)のところ。「...すべての罪を赦し清めて新たに生まれさせ、キリストの死と復活のさまに等しくし、...」。

・神さまは罪人であるわたしたちを救うために、イエス様を遣わされました。罪に縛られた状態のわたしたちを解放し、生きる者とするためです。イエス様の十字架にあずかり、そしてまた、イエス様の復活にもあずかるのです。

・「何もせずに罪が赦されるなら、そのまま罪人のままでずっといればいいじゃないか」、そのような反論をパウロは耳にしたのかもしれませんが。でもそうではないと彼は言います。罪を赦されたわたしたちは、義に生きる者となるのです。

(6月30日)「ローマの信徒への手紙6:8~11」

このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

(ローマの信徒への手紙6章11節)

・「キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きている」、とてもうれしい言葉だと思います。わたしたちはこの地上で生を受け、日々生かされています。その生の中で、イエス様に結ばれているというのは、どれほど大きな喜びでしょう。

・そしてその結びつきは、死をも超えます。イエス様が死の中からよみがえられたように、わたしたちも起き上がらせられるのです。わたしたちにとってもはや、死は全ての終わりではありません。

・お葬式をするときに、この言葉はいつも心の中に響き渡ります。確かに愛する人の死は悲しいです。涙もなかなかとまりません。でも死の向こう側にある命があるのです。その希望をもって、わたしたちは歩いていくのです。

使徒言行録・ローマの信徒への手紙 通読

6月



(6月 1日)「使徒言行録 28 : 7~10」

それで、彼らはわたしたちに深く敬意を表し、船出のときには、わたしたちに必要な物を持って来てくれた。

(使徒言行録 28 章 10 節)

・昨日の場面で、パウロは「神さまだ！」と言われます。それはパウロが毒蛇に噛まれたにもかかわらず、何も起こらなかったからです。その後パウロはマルタ島の長官プブリウスの元に行きます。

・プブリウスはパウロたちを歓迎し、三日間もてなします。プブリウスはパウロを神として崇めるのではなく、普通に交際していたようです。そのときにパウロは、プブリウスの父をいやしました。

・そのことを知って島の他の病人もやって来たので、パウロはその人たちもいやしました。しかしパウロはそのとき、イエス様の名によって願ったのでしょう。自分に不思議な力があるのではなく、イエス様が働いてくださることを心から信じていたのだと思います。

(6月 2日)「使徒言行録 28 : 11~16」

わたしたちはそこで兄弟たちを見つけ、請われるままに七日間滞在した。こうして、わたしたちはローマに着いた。

(使徒言行録 28 章 14 節)

・パウロたちがマルタ島に来てから三か月が過ぎ、冬が明けました。彼らはようやく出港することになります。彼らの船にはディオスクロイの船首像がついていました。ディオスクロイとはゼウスの双子の子という意味です。

・パウロにとっては、異教の神々です。しかしパウロは、だれが自分たちを守り導いてくれるかはよく知っていました。「船からその偶像をどかせ！」とは叫ばずに、パウロはその船に乗り込みます。

・そして彼らはシラクサ、レギオン、プテオリを経て、とうとうローマに到着しました。途中の場所にもきょうだい(仲間)たちがいて、パウロを歓迎したようです。そしてパウロはローマで、いわゆる軟禁状態におかれまして。

(6月 27日)「ローマの信徒への手紙 5 : 12~14」

このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです。

(ローマの信徒への手紙 5 章 12 節)

・創世記 3 章には、アダムとエバが蛇にそそのかされて、神さまが「食べてはいけない」と命じた木の実を食べた物語が載せられています。そのときに神さまは、アダムとエバを楽園から追い出しました。

・それ以来、わたしたち人間と神さまとの間には、大きな溝が生まれました。神さまとの関係が正しくない状態、これを罪と呼びます。つまり人間は生まれながらにして、罪を背負っているのです。この罪を「原罪」と呼びます。

・この罪によって、本来人間の死は滅びを意味していました。死に支配されている中で生きる、それがわたしたちの姿だったのです。しかしそこにイエス様が来られ、「アダムの子」ごと背負われたのです。

(6月 28日)「ローマの信徒への手紙 5 : 15~21」

一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。

(ローマの信徒への手紙 5 章 19 節)

・アダムの子によって、わたしたちもまた罪を背負って生きる者となりました。そう言われると、何だか不条理な気がします。親が借金をしてそれを相続するのと、何だか似ているような気がします。

・絵を書きながら失敗したときに、上から白い色を塗ってやり直すことがあります。薄い色の上だったり、少ない面積だったりしたらまだ修復可能ですが、全面真っ黒に塗られた後だったら、その作業は大変です。

・イエス様の十字架は、その黒い色を真っ白に変えてくれるものなのかもしれませんが。紙の色は本質的には黒いままで、白い色をかぶせることによって白にする。わたしたちも「キリストを着る」ことによって、義とされるのです。

(6月 25日)「ローマの信徒への手紙 4:19~25」

イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

(ローマの信徒への手紙 4 章 25 節)

- ・アブラハムとサラに息子イサクが与えられたのは、アブラハム 100 歳、サラ 90 歳のときでした。常識的に考えて、子どもができるのはもう無理だと考えられていました。アブラハム自身も最初はそう思っていました。
- ・しかし神さまは、その不可能に思えることを可能にすると約束されたのです。そしてアブラハムは、その約束を信じました。神さまの約束を疑うことなく、ただ信じた。その信仰が義とされたのです。
- ・そしてわたしたちには、復活のイエス様が与えられています。「見えないものを信じる」ことは、とても難しいことです。しかしその神さまの約束を信じることで、わたしたちもまた義とされるのです。

(6月 26日)「ローマの信徒への手紙 5:1~11」

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。

(ローマの信徒への手紙 5 章 3~4 節)

- ・信仰によって義とされたわたしたちは、神さまとの間に平和を得ます。ここで言う平和とは、戦争などの争いごとがない状態ということではなく、神さまと正しい関係にあることをいいます。平安と言ってもいいかもしれません。
- ・その恵みによって、わたしたちは神の栄光にあずかります。そこには希望もありますが、苦難も生じます。パウロの時代の迫害まではいなくても、信仰を持ち続けていく中に困難は生まれてしまうのです。
- ・しかしその苦難も、最終的には希望へと変えられるのです。聖書の中の「苦難→忍耐→練達→希望」という流れの中で「練達」という言葉がしっくりこなかったのですが、新しい聖書になって「品格」という訳に変わりました。それでもやはりしっくりこないですが。

(6月 3日)「使徒言行録 28:17~22」

あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい。この分派については、至るところで反対があることを耳にしているのです。

(使徒言行録 28 章 22 節)

- ・ローマにも、多くのユダヤ人がいたようです。パウロは彼らに対して、宣教と釈明をしようとしていました。宣教とはイエス様の十字架と復活を伝えること、釈明とはエルサレムで囚人としてローマの手に渡されたが無実であるということです。
- ・ローマにいるユダヤ人たちは、パウロがどうして捕らえられたかについて聞かされていませんでした。ただイエス様を信じる「分派」について、反対があることは知っていたようです。
- ・ユダヤ人たちはパウロに対して、直接話を聞かせてほしいと願います。うわさなどをうのみにせず、ちゃんと話を聞いて判断したいというのです。この姿勢は、わたしたちも見習いたいものです。

(6月 4日)「使徒言行録 28:23~28」

だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」

(使徒言行録 28 章 28 節)

- ・パウロは大勢のユダヤ人たちに、神の国とイエス様について語りました。話を聞いて納得した人もいれば、信じようとしなかった人もいました。わたしたちの間でもそうです。同じことを聞いても、受け入れる人とそうでない人ができます。
- ・パウロはその状況を、イザヤ書を通して説明します。「心が鈍り、頑なになっているからだ」というのです。出エジプト記のときに主がファラオの心を頑なにされ、主の栄光が現わされた場面を思い起こします。
- ・ユダヤ人の心が頑なになった結果、福音は異邦人へと向けられます。旧約聖書では救いはイスラエルから始まり、異邦人に広がると考えられていました。それが逆転するのです。後の者が先になるのです。

(6月 5日)「使徒言行録 28 : 30~31」

全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。
(使徒言行録 28 章 31 節)

・今年の1月1日から読み始めた使徒言行録ですが、ついに最終回です。パウロはローマで丸二年間、自由に宣教していたようです。また様々な場所で宣教する仲間に、手紙も書いたことでしょう。

・使徒言行録は、「神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」で終わっています。つまりパウロの裁判がどうなったのか、どのような最期を遂げたのかなどは書かれていません。聖書はそこを重要視していないのです。

・よく使徒言行録は今も続いていると言われます。たくさんの人たちがパウロの思いを引継ぎ、福音宣教者として歩んできました。そしてわたしたちもイエス様を証しする一人一人として、使徒言行録にその1ページを記していきましょう。

(6月 6日)「ローマの信徒への手紙 1 : 1~7」

この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたもいるのです。
(ローマの信徒への手紙 1 章 6 節)

・今日から「ローマの信徒への手紙」を読み進めていきます。この手紙はパウロが書いたもので、使徒言行録 18 章にあるコリント滞在中に書かれたと考えられています。パウロはそのとき、1年半コリントにいました。

・その時点でパウロはまだ、ローマを訪れたことはありませんでした。つまりこの手紙は他の多くの手紙と違い、まだ行ったことのない場所の人々に対して書かれたということです。さらにローマは、当時とても強大な国であり、異邦人の総本山ともいえる場所でした。

・その地に住む人々に向けて、パウロは真っ向から福音を伝えます。他のパウロの手紙は連名で書かれることが多いのですが、ローマ書は「パウロから」と、自分の責任において綴っていくことを宣言します。明日からゆっくり、内容を見ていきましょう。

(6月 23日)「ローマの信徒への手紙 4 : 9~12」

どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。それとも、割礼を受ける前ですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受ける前のことです。
(ローマの信徒への手紙 4 章 10 節)

・パウロは論理的に、アブラハムの義について語っていきます。このような議論の展開について行ける人と、ちょっと苦手に感じる人と入ると思います。わたしは後者です。そんなに白黒ははっきりさせていなくても、と思ってしまう。

・聖書によると、アブラハムが神さまから義と認められて(創 15 : 6)、割礼を受けるまでに(創 17 : 24)、29年の歳月が流れていました。つまり神さまは割礼の有無にかかわらず、「義」と認められる方だということです。

・そして義とされた証印として、割礼があったのだと説明します。しかし現在、わたしたちは割礼を受けていません。ではわたしたちには何が義とされた証印なのでしょうか。それは洗礼です。だからわたしたちは、洗礼を大切にしているのです。

(6月 24日)「ローマの信徒への手紙 4 : 13~18」

実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。
(ローマの信徒への手紙 4 章 15 節)

・パウロはアブラハムのことを例に挙げて、人は律法によって義とされるのではないということを語ります。「律法は怒りを招くもの」という表現は、なかなか過激なものだと感じてしまいます。

・YouTubeの中に、「ドラレコ動画」というものがあります。車やバイクにつけられているドライブレコーダーの動画を集めたものですが、交通違反や事故、トラブルの様子が流されます。

・交通規則を守らない人をネットで裁く。本来交通規制は、みんなが安全に交通できるように定められたものです。しかしそれが、人を裁き合うものになっていく。律法もそのようになっていたのかもしれない。

(6月 21日)「ローマの信徒への手紙 3 : 27~31」

実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。

(ローマの信徒への手紙 3 章 30 節)

・パウロはここではっきりと、「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考える」と語ります。この言葉は自らがユダヤ人ファリサイ派として律法を順守してきたからこそ、言えるものなのでしょう。

・その大転換のもととなったのが、イエス様の十字架です。旧約の時代、人々は自分の罪を償うために、良い行いを続けなければなりません。しかしそれは人間には不可能であったため、神さまはわたしたちの罪を贖うためにイエス様を遣わされました。

・そしてイエス様の十字架は、ユダヤ人だけでなくすべての人たちを神さまの元に導く架け橋となったのです。唯一である神さまは、だれか特定の人だけの方ではありません。信仰によって、すべての人は救われるのです。

(6月 22日)「ローマの信徒への手紙 4 : 1~8」

聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。

(ローマの信徒への手紙 4 章 3 節)

・アブラハムは「信仰の父」と呼ばれ、ユダヤ人から偉大な父祖として仰がれている人物です。彼には跡継ぎがなかなかできませんでした。あるとき神さまは彼を外に連れ出して言われました。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」。

・そして続けて言われました。「あなたの子孫はこのようになる」と。ただ一方的に与えられた約束です。そして創世記 15 章 6 節にはこうあります。「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」。

・アブラム (のちのアブラハム) は、ただただ信じました。神さまはその信仰をみて、彼を義、正しい者とされたのです。旧約の時代から実は、信仰による義が認められていたのです。その事実を、わたしたちも大切にしたいと思います。

(6月 7日)「ローマの信徒への手紙 1 : 8~15」

何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。

(ローマの信徒への手紙 1 章 10 節)

・コリントやエフェソには、パウロは直接行って福音を宣べ伝え、「教会共同体」をつくっていきました。ですからそこに宛てた手紙は、教会で奉仕をしている長老などに向けて書かれていたと思います。

・しかしパウロは、いまだローマには行くことができず、そこがどのような状況なのかよく分かっていなかったでしょう。世界各地にはディアスポラと呼ばれる離散したユダヤ人が住んでいました。そしてイエス様を信じた人たちも、ローマにいたようです。

・パウロがその人たちに手紙を書いた大きな理由は、「お互いに持っている信仰によって、共に励まし合いたい」ということでした。直接会って霊の賜物を分け与えたいという願いがなかなか叶えられない中、パウロは手紙によって力づけようとするのです。

(6月 8日)「ローマの信徒への手紙 1 : 16~17」

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。

(ローマの信徒への手紙 1 章 16 節)

・日本におけるキリスト教徒の割合は、1%だと言われています。さらに礼拝に参加するなど能動的に教会に属している人は、さらに少なくなってしまうと言われます。つまり日本では、キリスト教はマイノリティです。

・パウロが福音を宣教していたころ、イエス様を信じる人はまだ多くありませんでした。しかも信仰を公にすると、迫害される危険さえありました。その中でパウロは、「わたしは福音を恥としない」と語ります。

・自分が信じている「福音」が真実であることを知っているからこそ、どんな状況の中でもその福音を語るができるのです。わたしたちはどうでしょうか。福音を恥としてはいいのでしょうか。

(6月 9日)「ローマの信徒への手紙 1:18~23」

なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。

(ローマの信徒への手紙 1 章 21 節)

・パウロはまず、人間の罪について書きます。「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して」、神さまは怒りを現されるのだとパウロは述べます。具体的にはどのようなことを指すのでしょうか。

・神さまを拒否するということが、この中には含まれそうです。神さまの存在を知っていながらそれを否定し、自分の思いを優先して生きていく。それはわたしたちの中にもあることなのかもしれません。

・特にイエス様をこの世に遣わし、わたしたちの代わりに罪を贖い、十字架につけられた神さまの思いを知りながら、感謝するどころか退けていく人間の罪をパウロは問います。しかしパウロ自身も、最初はイエス様を受け入れることはできませんでした。

(6月 10日)「ローマの信徒への手紙 1:24~27」

そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。

(ローマの信徒への手紙 1 章 24 節)

・パウロは人間の罪について続けます。人間が心の欲望にまかせて汚れていきます。「造られた物を拝む」というのは、偶像礼拝のことです。その対象は像だけではなく、お金や名誉なども入るのでしょうか。

・そしてパウロは、男性どうしの「恥ずべきこと」について言及します。この箇所があるため、聖書は同性愛に対して否定的だとか、パウロは保守的だとか、そのような議論がなされることがあります。

・しかしこの時代の性や身体に対する理解と現代の理解とは、全く違います。聖公会は考え続ける教会です。その時代や考え方に合わせて、聖書の言葉を捉え直していくことが大切なのです。「イエス様ならどうするか」、そのことを念頭に置いて考えていきましょう。

(6月 19日)「ローマの信徒への手紙 3:19~20」

なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

(ローマの信徒への手紙 3 章 20 節)

・たとえば自動車を運転するときには、道路交通法を理解することが求められています。自動車教習所などでそれを学び、学科試験や実技試験を経たのちに免許証が渡され、公道での運転が可能になります。

・そこでの道路交通法は、「守らなければならない」規則です。道路交通法を知って運転技術が未熟な自分に気づく、という意味ではありません。わたしたちの身近にある様々な法律や決まりも同じです。それらは、「守らせるために」あるものです。

・しかしパウロは、律法とは「罪の自覚を生じさせるもの」なのだと言います。そもそも人間は罪深く、神さまの前に正しい者ではありえないというのが、彼の考えです。自分の心に悪い思いが生じるたびに、パウロの言っていることが心にストンと落ちます。

(6月 20日)「ローマの信徒への手紙 3:21~26」

すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。

(ローマの信徒への手紙 3 章 22 節)

・「ところが今や」、とパウロは語り始めます。これまでパウロはユダヤ人の罪に言及し、律法によっては誰一人として正しい者になることができない人間の姿をあらわにしてきました。

・その言葉を聞いたときに、わたしたちの心は沈み、暗闇の中に落とされてしまいます。しかしここで、パウロは語り始めるのです。「ところが今や」と。神さまは、信じる者に神さまの義を与えられるというのです。

・神さまはイエス様を遣わし、その贖いの業を通して、律法による義ではなく信仰による義を示されました。「今まで人が犯した罪を見逃して」という神さまの思いが、ここにあるのです。

(6月17日)「ローマの信徒への手紙3:5~8」

決してそうではない。もしそうだとしたら、どうして神は世をお裁きになることができましょう。

(ローマの信徒への手紙3章6節)

・パウロはユダヤ人と論争を繰り返してきました。その結果、いろいろな中傷を受けていたと思われまふ。その一つが今日の箇所に書かれたことです。ユダヤ人が正しくなかったら、どういうことになるのかと人々に言われたのでしょうか。

・神さまはユダヤ人を正しい者と認めるために律法と割礼を与えられたのに、律法によって人間の不義ばかりが強調されるとしたら、神さまはその人間を裁かなければならなくなるとユダヤ人は主張します。

・なかなかわたしたちには理解しがたい議論ですが、結局このようにして、人間は自分を正当化しようとするのです。わたしたちにも自分を正しい者と認められたいという欲求はあるでしょう。しかし神さまの目にわたしたちは高価で尊い、それだけでいいのです。

(6月18日)「ローマの信徒への手紙3:9~18」

次のように書いてあるとおりです。「正しい者はいない。一人もいない。

(ローマの信徒への手紙3章10節)

・「正しい者はいない。一人もいない」。この言葉がパウロから発せられるとき、わたしたちはドキッとするのでしょうか。それとも安心するのでしょうか。わたしはどちらかという、安心してしまいます。

・わたしたちの社会に目を向けてみると、非常に多くの「正義」が語られ、その「正しさ」の故に人の命を奪ったり、人を傷つけたりする現実があります。戦争の多くは、それぞれの「正しさの主張」から生まれているといっても過言ではありません。

・もし誰かを批判したくなったら、この「正しい者はいない。一人もいない」という言葉に立ち返りましょう。わたしたち一人一人は弱く、罪深い存在です。そのことを受け入れることが、まず大事なのです。

(6月11日)「ローマの信徒への手紙1:28~32」

彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。

(ローマの信徒への手紙1章32節)

・神さまに背いた彼らを、神さまは無価値な思いに渡されます。これはどういう意味なのでしょう。「もう知らない、好きにしたらいい」という感じなのでしょう。その結果、人々はしてはならないことをするようになります。

・パウロはここに、「悪いことリスト」をこれでもかというくらい書き記します。みなさんは人を妬むことや、陰口を叩くことはありませんか。傲慢になって思い上がることはないでしょうか。これは誰もが思い当たるリストだと思います。

・つまり人間の罪というのは、わたしたち誰もが身に覚えのあるものなのです。確かに牢獄に入れられるようなことまではしていないかもしれませんが。しかし神さまの前に、わたしたちはみな罪人なのです。

(6月12日)「ローマの信徒への手紙2:1~11」

神は人を分け隔てなさいません。(ローマの信徒への手紙2章11節)

・パウロは次に、神さまの裁きについて語ります。パウロはユダヤ人について、「人を裁きながら、自分も同じことをしている」と言います。彼はもともとファリサイ派の一員でした。ファリサイ派は厳格に律法を守っていたはずでした。

・そして彼らは周りにいる人の罪を指摘し、裁いていました。しかし彼ら自身も、実は罪の中にいたわけです。神さまが人々を悔い改めに導こうとしても、裁きの目で人を見る限り、その人自身も裁きから免れることはできないのです。

・そこには、「ユダヤ人だから」とか、「ギリシア人だから」とかいう違いはありません。ユダヤの人たちは自分たちを選ばれた民と考え、救いは自分たちにまず与えられると信じていました。しかしパウロは、神さまはすべての人に等しく恵みを与えてくださると説くのです。

(6月13日)「ローマの信徒への手紙2:12~16」

たとえ律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。

(ローマの信徒への手紙2章14節)

- ・現代のキリスト教会では、十戒を唱えることはあってもそれを本当に実行できているかどうかチェックをしたりしません。またレビ記を読んで、同じようにいけにえを献げることもないでしょう。
- ・では律法とは、一体何なのでしょう。神さまによる不変の定めというものののでしょうか。しかしこの手紙が書かれた時代には、人間が律法に枝葉をつけた結果、とてもややこしくなっていたことでしょう。
- ・祈祷書の教会問答には、「あなたはこの戒めを、人の力で守られると思いませんか」という問いがあります。その答は、「人の力だけでは守られません。神の助けが必要です」です。そのことをいつも心に留めることが大切なのではないでしょうか。

(6月14日)「ローマの信徒への手紙2:17~24」

それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。「盗むな」と説きながら、盗むのですか。

(ローマの信徒への手紙2章21節)

- ・パウロはここから、「ユダヤ人と律法」について語ります。ユダヤ人の特権意識について、そして他人を裁きながら自分が同じ過ちを繰り返している現状について、厳しく追及するのです。
- ・律法は本来、どうしても正しい方向に進むことの出来ない人たちに対する道しるべの役割を担っていました。ユダヤ人の宗教指導者は律法を通して、神さまに向かう道を人々に示すように導かれていたはずですが。
- ・しかし彼らは、神さまから見たら律法を平気で破っているというのです。わたしたちも神さまの福音を知りながら、他人に「～しなさい」ばかり押し付けてはいないでしょうか。まず自分の目の中にある丸太に気づかないといけないのかもしれない。

(6月15日)「ローマの信徒への手紙2:25~29」

外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。

(ローマの信徒への手紙2章28節)

- ・パウロはユダヤ人と律法について語る中で、割礼について言及します。ユダヤ人の男性は、生後8日目に割礼を受けます。このときに初めてその子は、「ユダヤ人」となるのです。異邦人もユダヤ教に改宗するときには、割礼を受ける必要があります。
- ・割礼は神さまとの契約関係を外に示すもの、つまり目に見えるしるしと考えられてきました。しかしパウロは、体ではなく心に施された割礼こそが大切なのだと言います。「まことのユダヤ人」とは何かを語るのです。
- ・わたしたちは、割礼を受けていません。それは目に見えるものではなく、目に見えないものを大切にするからです。神さまがイエス様を遣わされたことで、わたしたちが「契約のしるし」を体に刻まなくても神さまとの間にあった溝は埋められたのです。

(6月16日)「ローマの信徒への手紙3:1~4」

決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。「あなたは、言葉を述べるとき、正しいとされ、裁きを受けるとき、勝利を得られる」と書いてあるとおりです。

(ローマの信徒への手紙3章4節)

- ・パウロはここで、「では、ユダヤ人の優れた点は何か。割礼の利益は何か。それはあらゆる面からいろいろ指摘できます。まず～」と、これまでの流れとは少し違うことを語り出します。
- ・パウロはもともと、ユダヤ人の中のユダヤ人として割礼も受けていましたし、またファリサイ派として律法に忠実に生きてきました。そしてその結果としてキリスト者を迫害してきたわけです。
- ・パウロはユダヤ人の立場に戻って、自己弁護をしようとしたわけではありません。信じる人が義とされるという信仰義認に立ったとき、割礼という人のおこないよりも大きな神さまの愛に気づかされます。わたしたちに委ねられた神さまの言葉を信じるのが大事なのです。